

ミニデイ【おとこの台所 桜新町だより】

発行責任者 桜新町広報：柏木君夫、岡元正史

● SF映画の金字塔「2001年宇宙の旅」

アメリカでの公開は1968年4月6日。

アポロ11号の月面着陸が、1969年7月20日。映画公開の1年後だ。

猿人から人類への進化、地球外生命との遭遇、惑星間の宇宙飛行、AI（人工知能）の制御不能な暴走などがテーマ。半世紀以上前のSF映画として斬新な映像だった。

またCG技術がない時代に、精巧な模型などアナログな技術を使って撮影された。

一般公開に先だつプレミアでは、製作したMGMの重役が「難解。困惑だ」と退席。

映画批評家の評価も良くなかった。

しかしラジオ放送のDJを通して（今なら「SNS」から）、若者から火が点いた。

日本での公開は4月11日。70ミリ・シネラマの贅沢な映画であった。

銀座1丁目の「テアトル東京」で観た。クラークの「幼年期の終わり」を読んでいたの、何となく理解できた。その後も映画館や、DVDで繰り返し観ている。

● スタンリー・キューブリック（アメリカの映画監督）

クラーク「幼年期の終わり」の映画化を企画。しかし映画化権は既に他社が取得済みだった。そこでキューブリックはクラークに映画の共同脚本を持ち掛ける。漫画家・手塚治虫に、美術監督をオファーしたが、手塚治虫は断ったという。

● アーサー・C・クラーク（イギリスのSF作家）

1945年、通信衛星の論文「地球外電波中継」を発表した。3個の静止衛星を打ち上げれば、世界中を電波がカバーできるというものだった。のちにクラークが「特許を取っていれば大金持ちになった」と後悔(?)していたアイデアだった。

● 映画「2001年宇宙の旅」を観て育って、科学者になったチルドレンたち

2015年、NASAの冥王星探査衛星が写した二つの並んだ山に、チルドレンたちは「キューブリック山」と「クラーク山」と命名した。

半世紀後の今も「2001年宇宙の旅」は、世界中で繰り返して上映されている。

